

# 神奈川県発掘調査成果発表会 2023

## ◆日 時

令和5年6月17日（土）14:00～16:30

## ◆内 容

- 「新道遺跡第2次調査」（大和市） ——— 1  
麻生 順司（株式会社玉川文化財研究所）
- 「三田林根遺跡第4地点」（厚木市） ——— 3  
北平 朗久・坪田 弘子（株式会社玉川文化財研究所）
- 「河原口坊中遺跡第13次調査」（海老名市） ——— 5  
高橋 歩（株式会社玉川文化財研究所）
- 「諏訪前A遺跡第17次調査  
・七ノ域遺跡第12地点」（平塚市） ——— 7  
市川 正史（株式会社アーク・フィールドワークシステム）

25,000年前の<sup>れきぐん</sup>礫群の大量出土

しんみち

# 新道遺跡第2次調査

**所在地** 大和市上和田地内  
**調査期間** 令和3年8月3日～令和4年7月6日  
**調査面積** 217.448㎡  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 麻生順司・小林晴生

**調査概要** 本遺跡は小田急江ノ島線<sup>さくらがおか</sup>桜ヶ丘駅の北東0.9kmに位置します。地勢的には大和市城南東部の<sup>さかいがわ</sup>境川を見下ろす相模野台地の東側縁辺に立地し、標高は約57mを測ります。



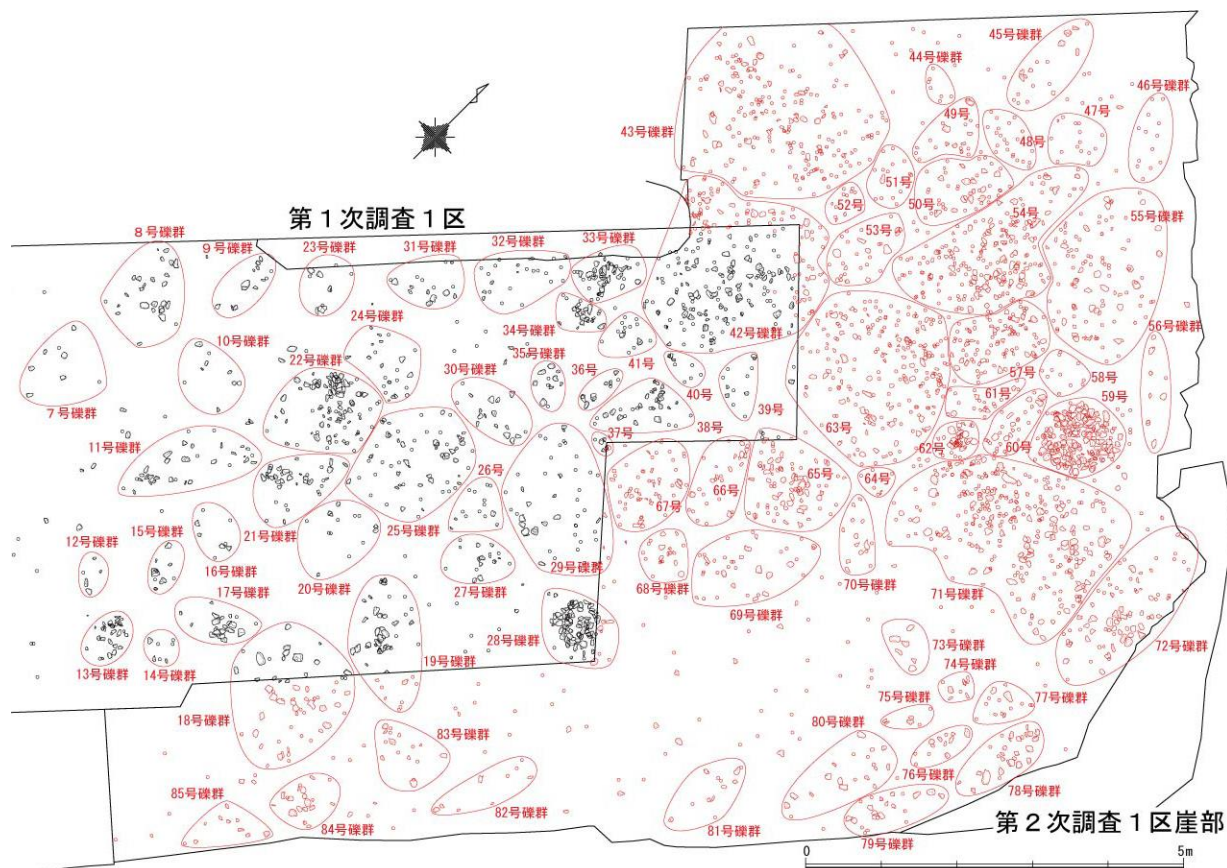
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本遺跡の調査は3地区に分けた調査区が設定されており、令和2年から3年にかけての調査では1区の北東側崖面および木根、擁壁を避けた約145㎡について第1次調査が行われ、関東ローム層B1層上部・B1層下部・B2L層上部の3時期の文化層が設定されました。特に、B2L層上部からは8箇所の石器ブロックと42基の礫群が検出され、非常に密度の濃い遺構群が確認されています。今回行われた第2次調査では前回の調査で調査区から外された1区崖部と2区を挟んだ南西側に位置する3区で調査が行われましたが、今回の報告では第1次調査で確認された第Ⅲ文化層の遺構群のさらなる広がりが見られたことから、第1次調査の内容を含めて1区崖部全体の様相を中心に説明します。

第2次調査では1区崖部のB2U～B2L層最上部（約25,000年前）に相当する第Ⅲ文化層から合計で約4,400点の遺物が検出されました。その内の約1,200点が石器であり、前回調査で確認された8箇所の石器ブロックを合わせて合計13箇所の石器ブロックが確認されました。石器群の内容としては、この時期の大きな特徴である大量の<sup>きりだし</sup>切出形ナイフ形石器を中心に<sup>かくすい</sup>角錐状石器や<sup>えんけいそうき</sup>円形搔器などが確認されています。

一方の礫群は第1次調査時に42基が検出されていましたが、今回の第2次調査ではさらに43基の礫群が検出されて合計85基の礫群が調査されました。特に本遺跡では第2図に示した143㎡の範囲に80基の礫群が検出されており、10×10mの100㎡に換算すると56基という密集度を示していました。まさに足の踏み場も無い状況で、一時期の文化層にこのような大量の礫群が発見された本遺跡は礫群の発見例の多い南関東でも類を見ない遺跡と言えます。特に今回の第2次調査で確認された59号礫群（写真2）は、径0.9mほどの円形の範囲に174点の礫が密集して構築されており、第1次調査で検出された28号礫群を含めて旧石器時代の礫群の廃棄状況を考える上で重要な資料と言えます。

（麻生 順司）



第2図 第Ⅲ文化層の礫群配置図 (1/100)



写真1 第Ⅲ文化層の礫群全景 (南西から)



写真2 第Ⅲ文化層 59号礫群 (北西から)



写真3 第Ⅲ文化層 62号礫群 (西から)



写真4 第Ⅲ文化層 72号礫群 (南西から)

## 縄文時代中期の大規模な集落の調査

さん だ はやし ね

# 三田林根遺跡 第4地点

所在地 厚木市三田字林根地内

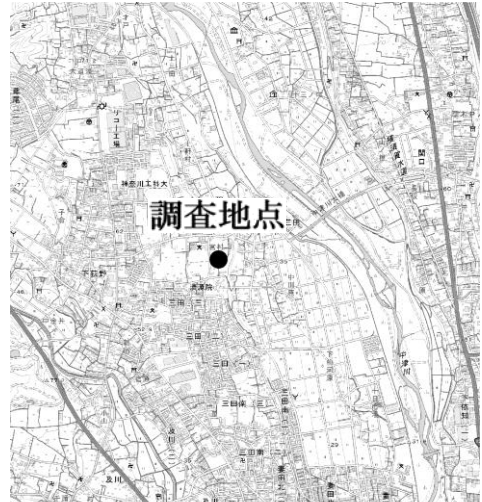
調査期間 令和3年12月6日～令和4年10月11日

調査面積 約1,534.5㎡

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 北平朗久・迫 和幸・坪田弘子

調査概要 三田林根遺跡は厚木市の北東部に位置しています。地形的にみると、<sup>なかつがわ</sup>中津川と<sup>おぎのがわ</sup>荻野川に挟まれた荻野台地上の標高約53.8mを測る平坦部から東側縁辺部にかけて立地しています。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本遺跡では既に北東側から東側にかけて3地点の調査が行われ、縄文時代中期後半の拠点的な集落跡が発見され

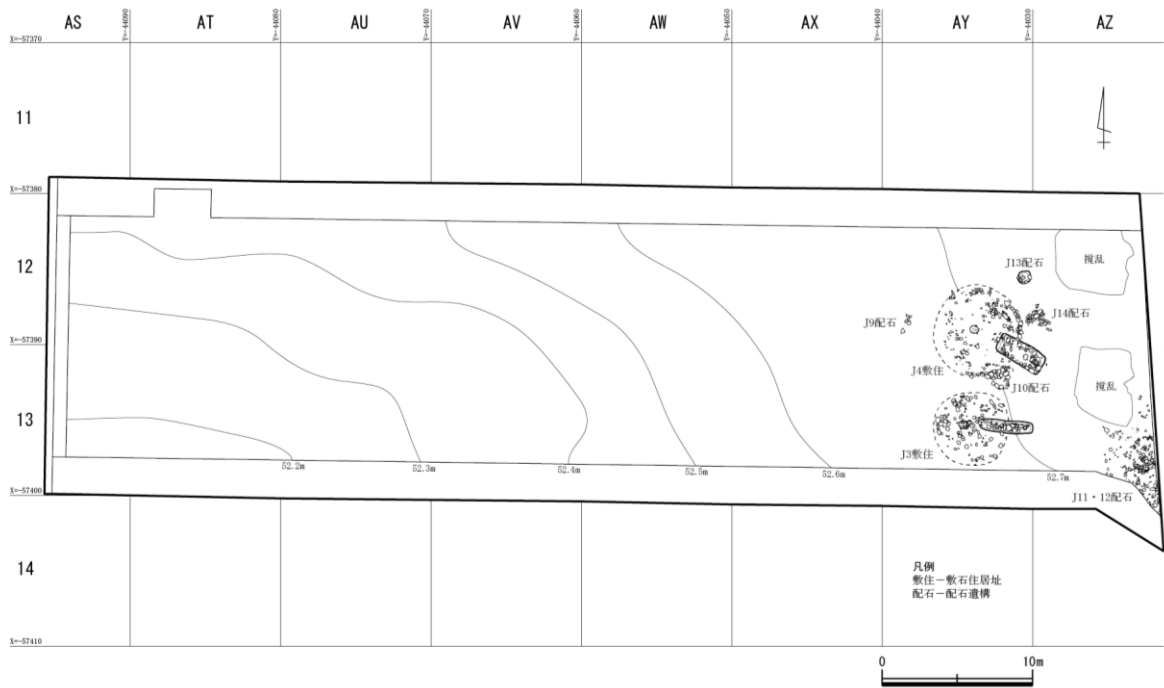
ています。今回の調査地点からもこの集落の一部と考えられる遺構群を確認しました。検出した遺構は敷石住居址2軒、<sup>ほったてぼしら</sup>竪穴住居址3軒、<sup>はいせき</sup>掘立柱建物址2棟、<sup>しきいしじゆうきよ</sup>配石遺構6基、<sup>おと</sup>埋設土器1基、<sup>どこう</sup>陥し穴1基、<sup>かそり</sup>土坑18基、<sup>せきふ</sup>ピット160基で、調査区の東側を中心に分布しています。遺物は主に縄文時代中期後半の土器・石器などが出土し、なかでも加曽利E3～E4式期の土器群が多くを占めています。石器には<sup>こくようせき</sup>打製石斧、<sup>さつき</sup>黒曜石製を主体とする<sup>せきぞく</sup>小形削器・石鏃が多くみられました。

今回の調査地点で最も古い段階と考えられる加曽利E3古～中式期の遺構は、掘立柱建物址2棟です。この2棟は長軸、短軸ともに2本の柱からなる構造と推定され、規模(長軸3.8～3.95m)と主軸方位(北北西)がほぼ同じで、南北に並びます。その他に土坑6基が当該期に属します。次の加曽利E3新式期の遺構は、<sup>ほりだし</sup>竪穴住居址3軒、<sup>えかがみ</sup>埋設土器1基、土坑1基などを検出しました。最新段階にあたる加曽利E4式期には、敷石住居址2軒、配石遺構6基、土坑1基などが属します。敷石住居址はいずれも張出部をもつ柄鏡形です。調査区の西側で検出した陥し穴は、出土遺物がないため時期の詳細は不明ですが、覆土の状態から縄文時代早期～前期と推定されます。陥し穴は本遺跡では初見です。

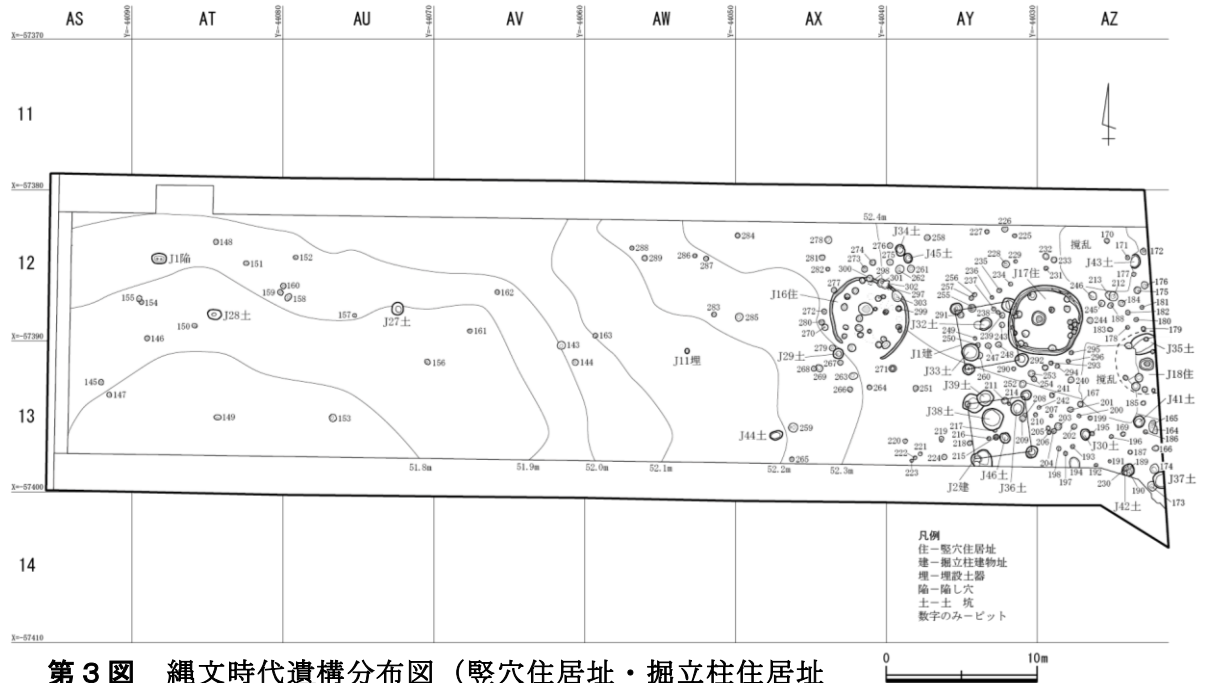
今回の調査地点で最も古い段階と考えられる加曽利E3古～中式期の遺構は、掘立柱建物址2棟です。この2棟は長軸、短軸ともに2本の柱からなる構造と推定され、規模(長軸3.8～3.95m)と主軸方位(北北西)がほぼ同じで、南北に並びます。その他に土坑6基が当該期に属します。次の加曽利E3新式期の遺構は、<sup>ほりだし</sup>竪穴住居址3軒、<sup>えかがみ</sup>埋設土器1基、土坑1基などを検出しました。最新段階にあたる加曽利E4式期には、敷石住居址2軒、配石遺構6基、土坑1基などが属します。敷石住居址はいずれも張出部をもつ柄鏡形です。調査区の西側で検出した陥し穴は、出土遺物がないため時期の詳細は不明ですが、覆土の状態から縄文時代早期～前期と推定されます。陥し穴は本遺跡では初見です。

縄文時代以外では、弥生・古墳時代の土坑1基、奈良・平安時代の土坑16基、ピット39基、中世の溝状遺構1条、近世以降の掘立柱建物址1棟、道状遺構1条、<sup>うね</sup>畝状遺構105条、土坑241基、ピット33基を検出しました。

まとめ 今回の調査では縄文中期集落の西側の限界を確認でき、新知見として加曽利E3式期には掘立柱建物址を伴う集落であることが明らかとなりました。また、近世以降の当該地は生産域として利用されていたことが分かりました。(北平 朗久・坪田 弘子)



第2図 縄文時代遺構分布図（敷石住居址・配石遺構）（1/500）



第3図 縄文時代遺構分布図（竪穴住居址・掘立柱住居址  
・埋設土器・陥し穴・土坑・ピット）（1/500）



写真1 J3・4号敷石住居址全景（東から）



写真2 J1・2号掘立柱建物址全景（北から）

相模川の自然堤防上に形成された弥生～中世の集落の調査  
かわらぐちぼうじゅう

## 河原口坊中遺跡 第13次調査

**所在地** 海老名市河原口三丁目地内  
**調査期間** 令和4年6月13日～令和5年5月8日  
**調査面積** 538㎡（1区292㎡、2区246㎡）  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 石川真紀・高橋 歩

**調査概要** 河原口坊中遺跡は、相模川中流域東岸に沿って形成された自然堤防上に立地する遺跡です。第13次調査では、2箇所の調査区を設定しました。

**近世以降** 近代では礎石建物1棟が発見され、旧宗珪寺に関連する遺構と考えられます。近世では畝状遺構7箇所のほか、井戸や溝状遺構、土坑などが発見されました。畝は調査区のほぼ全域で確認され、近世では耕作地として利用されていたことがうかがえます。

**中世** 竪穴状遺構7基、耕作に関する溝状遺構45条、区画溝7条のほか、多数の土坑やピットなどが発見されました。土坑のうちの1基では口縁部を欠損した灰釉陶器の瓶が埋置されていたことから墓であった可能性が考えられます。新旧関係では区画溝が古く、竪穴状遺構や耕作に関する溝状遺構、土坑が新しい状況が確認され、隣接する第9次調査で発見された掘立柱建物を踏まえると中世では居住域から耕作地または墓域への変化が捉えられました。

**古墳時代中期～奈良・平安時代** 竪穴住居93軒のほか、竪穴状遺構、溝状遺構、土坑、ピットなどが発見されました。竪穴住居は古墳時代後期に増加し、奈良時代以降に減少する傾向がみられ、土坑、ピットなどは比較的新しいものが多いことが分かっています。

**弥生時代後期～古墳時代前期** 竪穴住居1軒、方形周溝墓7基のほか、溝状遺構や土坑などが発見されました。土坑には土器棺を埋置するもののほか、比較的残りのよい土器を含むものもありました。第9次調査の成果も踏まえると、方形周溝墓は周溝の四隅の一部が途切れる形態で、竪穴住居よりも新しいことが捉えられました。

**弥生時代中期** 方形周溝墓4基、溝状遺構8条のほか、土坑・ピットなどが発見されました。中期の方形周溝墓は周溝の四隅が途切れる形態のものが特徴です。溝状遺構には方形周溝墓の一部と考えられるものもありました。

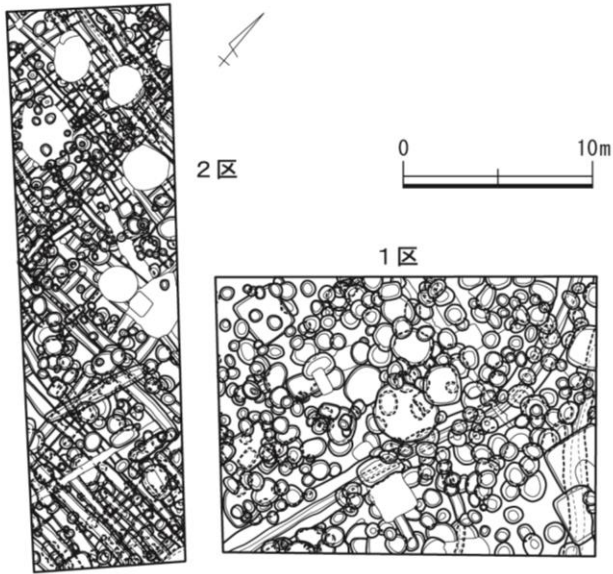
**まとめ** 今回の調査区では、弥生時代中期から近世以降にかけての遺構・遺物が発見されました。弥生時代では主に墓域、古墳時代中期から後期、奈良・平安時代、中世前半では居住域としての土地利用が確認できました。中世後半以降は主に耕作地または墓域となり、近代では一部が寺域に転用されたことも明らかとなりました。

(高橋 歩)

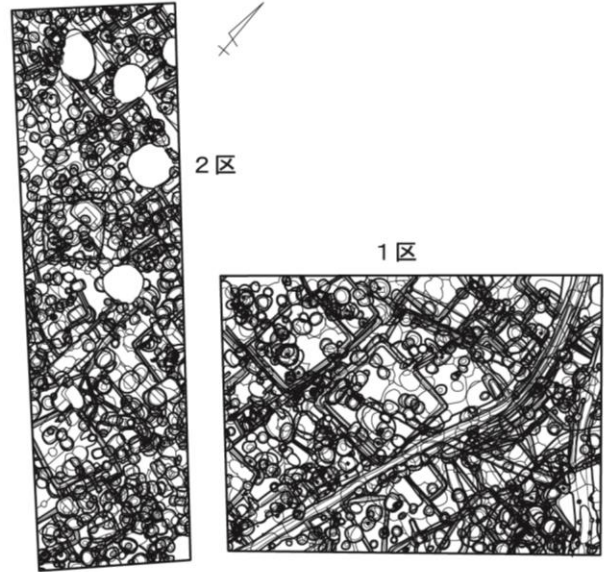


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

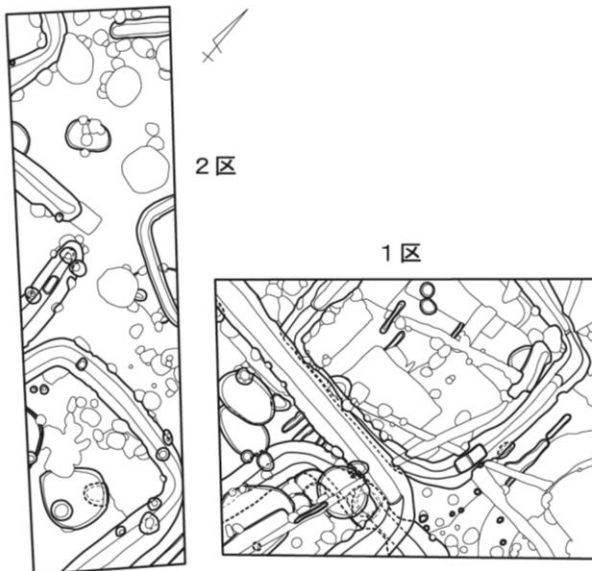
中世遺構分布図(1/400)



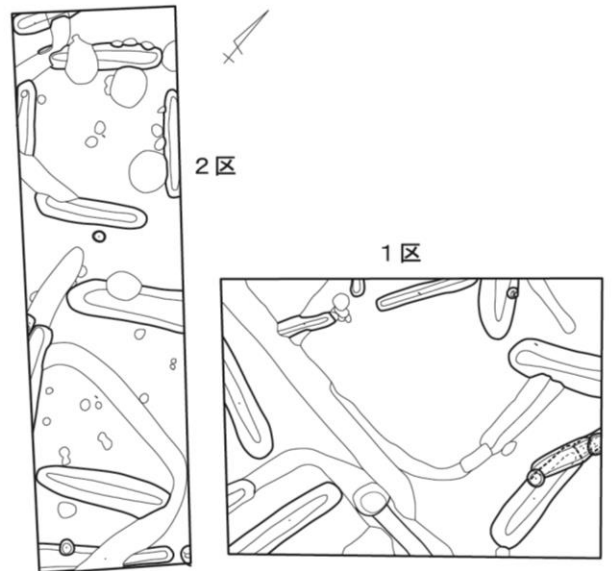
古墳時代中期～奈良・平安時代遺構分布図(1/400)



弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図(1/400)



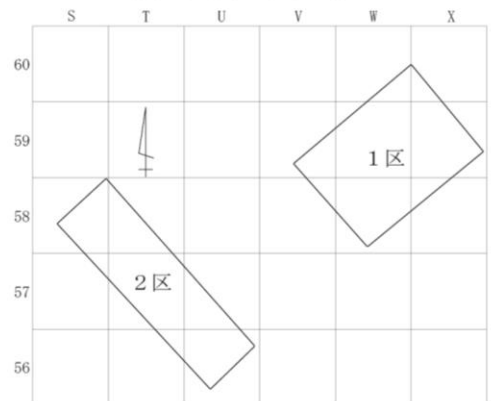
弥生時代中期後半遺構分布図(1/400)



2区Y2号土坑土器出土状況(南から)



調査区配置図(S=1/1000)



第2図 時代別遺構分布図・調査区配置図・2区Y2号土坑土器出土状況

## 相模国府周辺に形成された古墳時代後期～平安時代の集落の調査

すわまえ

ななのいき

# 諏訪前A遺跡第17地点・七ノ城遺跡第12地点

**所在地** 平塚市東真土一丁目地内

**調査期間** 令和3年11月15日～令和4年6月24日

**調査面積** 1～6区 計989㎡

**調査組織** (株)アーク・フィールドワークシステム

**担当者** 柳川清彦・市川正史

**調査概要** 神奈川県平塚土木事務所による都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う調査で、両遺跡は東西に隣接しており、現在の海岸線から約6km内陸の砂丘上に立地しています。相模国の国府域と推定されている19遺跡のうちの2遺跡で、国府域の北辺中央付近



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

に所在しており、今回の調査地点は両遺跡の北寄りに位置しています。

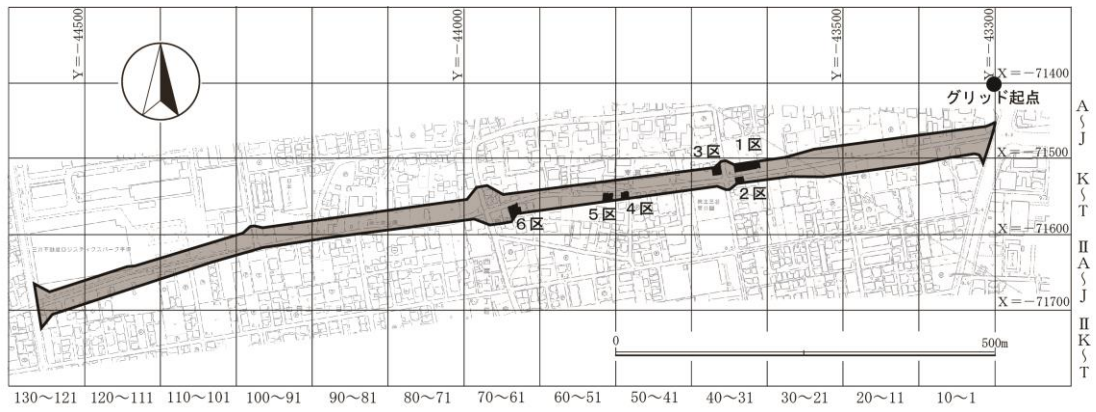
**近世以降** 耕作跡が5箇所のほか、溝状遺構15条・土坑7基・ピット12基が確認されただけで、当時調査区一帯は畑作地であったことがうかがえます。

**中世** 掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構1基・溝状遺構21条・土坑8基・ピット70穴が確認されました。掘立柱建物跡は2×4間の規模で、諏訪前A遺跡では初めての発見です。溝状遺構の中には幅120cmと屋敷を囲う方形区画溝の可能性のある溝も存在します。その他の溝は灌漑用や畑地の区画といったものが主体をなしているようです。

**古墳時代後期～平安時代** 竪穴建物跡37棟・井戸跡1基・溝状遺構17条、土坑65基、ピット31基が確認されました。竪穴建物跡は調査地点により時期を異にしており、3区では7世紀中頃～後半、1区では7世紀後半～9世紀後半、5区では9世紀前半～10世紀中頃が主体となっています。9世紀前半に機能していたとみられる井戸跡の東側には同時期の竪穴建物跡が多く分布することが明らかになっています。10世紀中頃以降、竪穴建物跡は建てられなくなる一方、径1～1.5mの円形土坑が多数作られるようになります。円形土坑については様々な用途が考えられますが、4・5区及び隣接する調査済箇所からは200基近く検出されており、部分的に密集するなどから墓坑の可能性が高いと考えられます。遺物は土師器のほか、須恵器や灰釉陶器、緑釉陶器なども出土していますが、近年までの耕作により、細片化したものがほとんどです。僅かに須恵器底部に「高」と刻書されていたのが注目されます。

**まとめ** 諏訪前A遺跡で1・2区、七ノ城遺跡で3～6区と東西約350mの間を飛び飛びに調査したため各調査区の各時代の様相が異なっていますが、これは砂丘域の複雑な地形によるものと考えられ、各時代その地形に応じた土地利用が行われたものと考えられます。国府が置かれていた奈良・平安時代にあっては国庁からやや離れており、遺構の密度は薄いようです。(市川 正史)

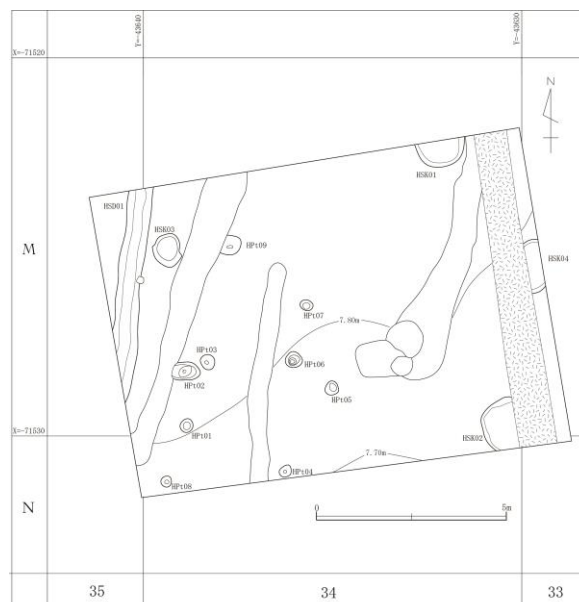




第2図 調査区位置図 (1/1,000)

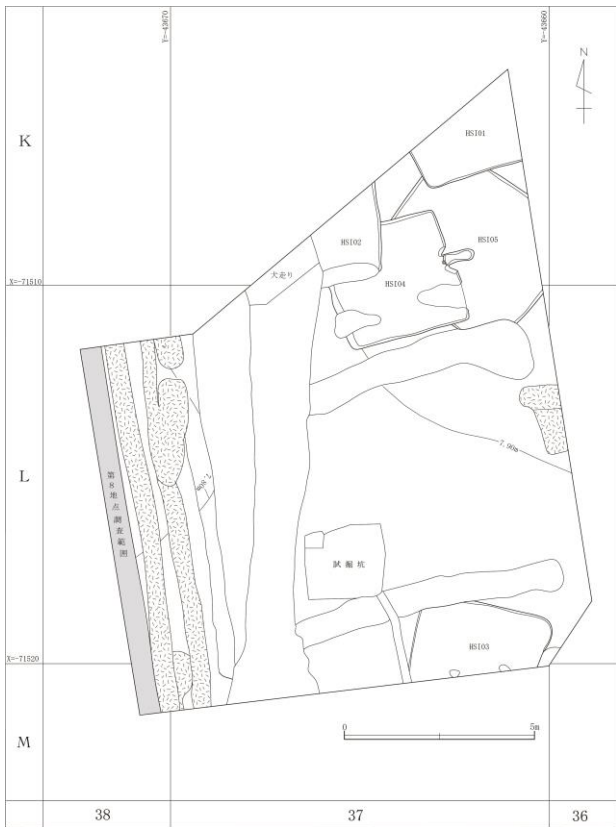


1区 (1/400)

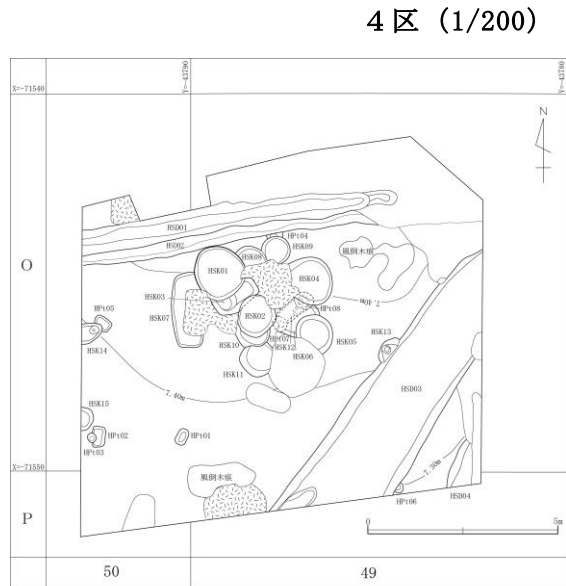


2区 (1/200)

第3図 1・2区古墳時代後期～奈良・平安時代遺構全体図



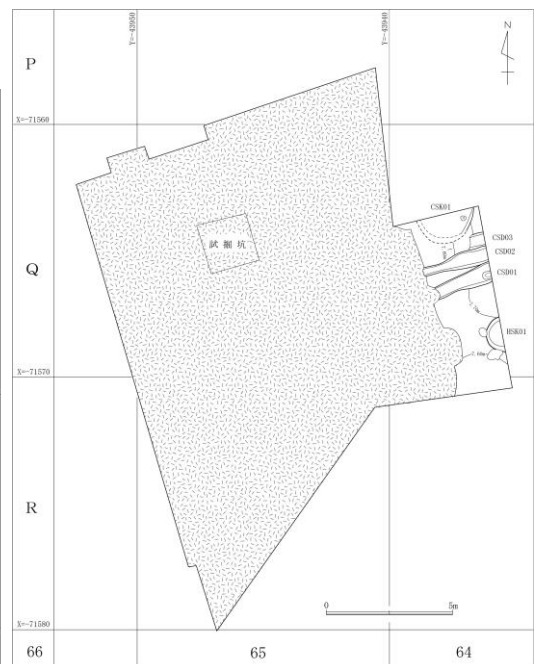
3区 (1/200)



4区 (1/200)



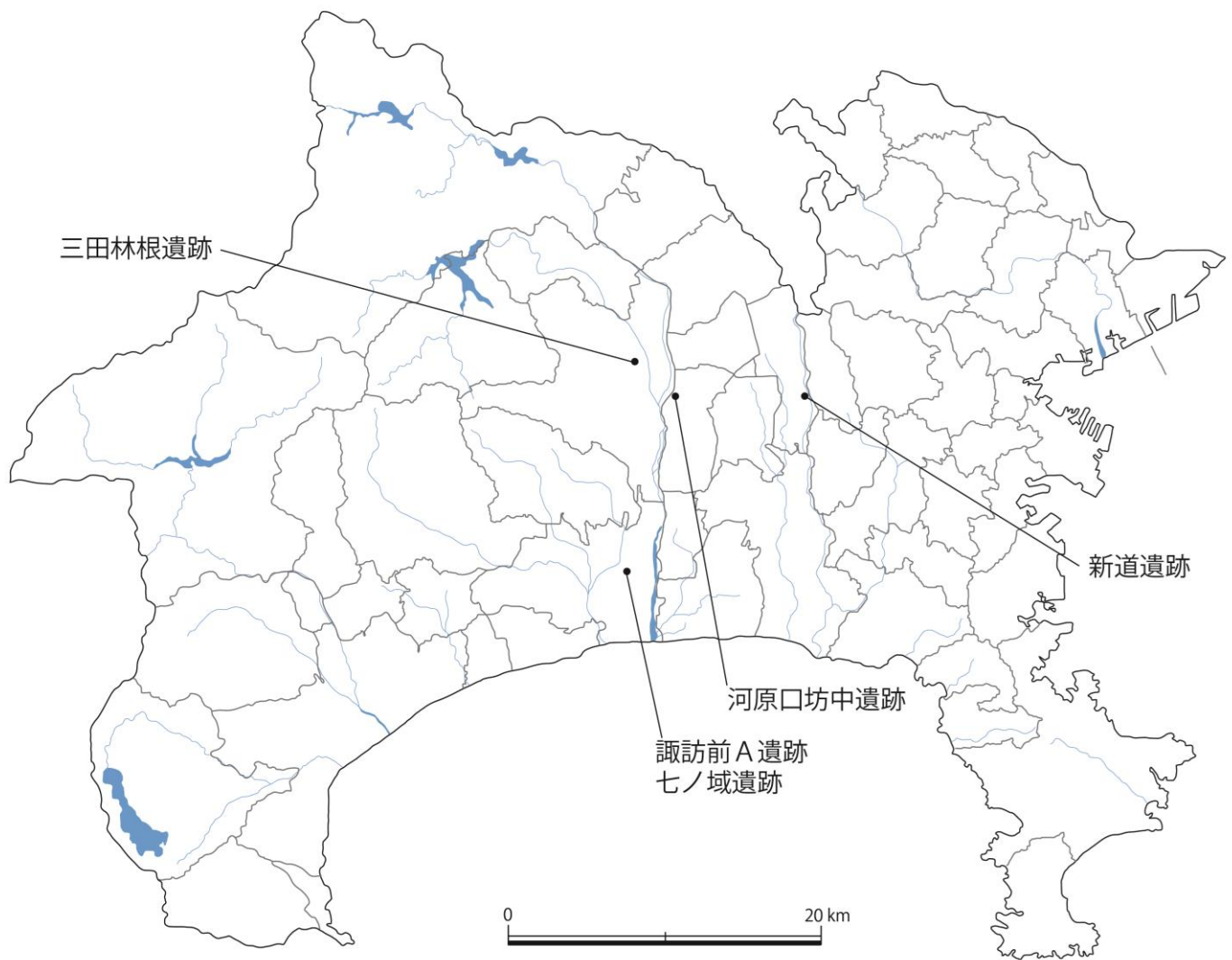
5区 (1/200)



6区 (1/300)

第4図 3～6区古墳時代後期～奈良・平安時代遺構全体図





神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う事業に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的としています。